



# 現代少女 の 新用語

▲バンド 奏樂と云ふことである。次ぎに示す文章は横濱か神戸か、さうした港町の海岸の叙景に使はれたものである。

海岸の砥のやうな平な道を、夢中になつて歩いてゐると、この時、最端のホテルのあたりから、洋々としてバンドの響が起つた。

▲競々 びく／＼する、びく／＼と云ふほどの意味の形容詞である。鬢子は生れて初めて母の手を離れた

不安と、計り知られぬ主人の思はくのみ競々として、燈火美しい都大路の光景を見ようとさへしなかつた。

▲激昂 激ははけしい、昂はあがるの意義で、激しく昂奮した場合を形容した言葉である。

▲潤澤 潤はうるほひ、澤はつや、つまり、ものゝ餘分にあると云ふ意味なのである。

「あの方の思想は本當に潤澤ね。」  
こんな風に用ひて差支ない。

▲煉腕 うでき／＼と云ふこと。  
「佐藤さんはね、學校でも一番の煉腕家よ、だけれども、それは首なしの方でちつとも生意氣なところのない人です

わ。」

▲弊履 破れぐつと云ふ事である。よく次ぎのやうな場合に用ひられる。弊履の如く捨て去つた。

「まあま今暫く忍耐して、あの女を召使つて見て、それでも如何してもいけないやうなら、その時は斷然、弊履を捨ててゐるやうにひまをお出しなさい」  
つまりをしげもなく物を捨ててる場合などに用はれる。

▲病葉 むしくひ葉と云ふ言葉である。  
▲離愁落莫 離愁はものに離れた悲哀、落莫は落ぶれたと云ふ意味。朝に夕に相親しんだ人達や、家屋な

どに別れた離愁——と云ふやうなものをそよ／＼に感じた。崖のほうげせに風の鳴る日などは、一層落莫の氣が身内を襲つて、去り行つた人達を懐はずには居られなかつた。

▲妖美 まどはす美しさを云ふ。クレオパトラ、淀君の美を形容するにふさはしい言葉である。

▲官能 眼鼻口、それら五官の働きを意味する言葉である、一體に近代の文藝は官能的になつて来た。イタリ一の文豪ダメンチヨーは、特に官能派を以て知られてゐる。

▲消耗 消しへらすの意味で、精力の消耗など、この頃の流行語の一つである。

▲徹底 底に徹するの意味である。  
「私ね、熱いならウンと熱いのが好きだし、寒いなら、すつと思ひ切つて寒い方が好いわ、熱くもなし、寒くもな

し、と云つたやうな、そんな中ぶらりんの徹底しない事は大嫌ひ」と、斯う云ふ場合に用ひても差支ない。

▲妥協 やたらに我意を通さず、或る程度まで互に譲歩し合つて、いゝ加減なところで折合つてしまふ事を妥協すると云ふのである。

例へば此處に二少女があつて、お菓子を買はうとする場合、Aは羊羹が好いと云ひ、Bはカステラが好きだと云ふ、それを羊羹にもせず、カステラもよして、A B二人共好きなシウクリームを買ふ事にする、するとA Bの二少女は妥協した事になるのである。

▲餘瀝 あまりの滴と云ふ程の意味である。  
今飲んだ酒の餘瀝が唾か、口のあたり光つて見える——こんな風な時用つても可い。

▲凝視 ちつと見詰める事である。  
「あの眼鏡で凝視されるんだもの、私

たまらなくなつて、俯向いちまつたの」  
▲紅潮する サツと顔を染める事を云ふ。  
娘は黙つて紅潮して顔を俯向けたまま、また忙がし／＼袋を貼る。たえず働く袖の脇から、薄／＼に色の振がちらちらもれて、それが何となく暗い沈んだ家の中に匂やかに見えた。

何處かで斯ういふ文章を読んだ事があつた、面白いがき振りだと思つた。

▲圓熟 圓満に成熟したと云ふ意味の略語である。  
「圓熟なる筆致かな」と云ふ風な形容詞に用ふ。

▲矜傲 矜も傲もどちらもほこる、おごるの文字で、英語のプライドと云つた意味に同じである。  
「花子さんは随分天才的な方だけれど割合に矜傲な態度はないやうね」——

一寸こんな風に云ふのである。

(永代美知代)